
いちごの砂糖漬け

霧ヶ峰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いちごの砂糖漬け

【Zコード】

N1781X

【作者名】

霧ヶ峰

【あらすじ】

あまり目立たないよつとしている女の子が偶然が重なって好きな
人に料理を教えたり、告白しないといけない状況になる話。

こひわめ（前書き）

初投稿で初小説です。

こひわめ

栗色の髪に色素の薄い茶色の目。整った顔立ち少年がパンを片手に友人たちとじやれあつていてる。

学校の屋上で、あの人を見ながら匂い飯を食べる。私だけの至福の時。それがあの日から私の平穏な日常が変わり始めたのだ。あんなに取り繕つてたものが簡単に剥がれ落ちるなんてこのときは何も思つていなかつたのだ。

「三咲さん？」

「へ？」

初めて声をかけられたのは近所スーパーの前でだ。あの人の華奢な手にはスーパーの袋がぶらさがつてている。袋の中からネギやゴボウ、特売品の刺身のパックが顔を覗かせていた。

うん、似合わない。

「西東くんだよね？」

「うん、こんなところで三咲さんと会つとはね」

私もこの寂れたスーパーで西東くんに会つとは思わなかつた。西東くんと言えば校内でも結構目立つグループにいる。友達と一緒にコンビニにこごるとこからは見たことはあるが、このスーパーで彼を見た

「Jとは無い。

「三井さんはなにを買いにきたの?」

「晩御飯のおかず。西東くんは?」

「・・・俺も」

西東くんが苦い顔で言葉を発したので私はすぐ驚いてしまった。
そこで初めて気づいたが私は彼の笑顔しか知らないのだ。おそらく
だが彼のクラスメイトも、友人も、この彼の姿を見たことがないの
ではないか。

彼はそんな私の様子を見て苦笑いしながら言葉を続けた。

「・・・父さんが働いてたんだけどね、リストラにあっちゃつて。
新しい職場探してるんだけどみつからない。給料は無いし、今にい
たっては家で酒ばかり飲んでるから、母さんがパート行くことに
なったんだ。だから今日から家事は俺の役目」

西東くんのお父さんは有名な会社で働いていると聞いたことがある。
その会社については知らないがこ西東くんはこの頃の昼食は菓子パ
ンばかりだった。そういう理由だつたんだ。

でも、ちょっとまつて。

「ひとつ聞きたいんだけど…そんな話わたしにしてよかつたのかな
?」

「うん…それはいいんだ。誰かに聞いて貰いたかっただけだし。三
宅さん口固そうだから。あと、ちょっとだけ心が軽くなつた。あり
がとう」

西東くんの笑顔を間近で見てしまつた。すごい羞恥心に襲われて顔が赤くなり目をそらしてしまつた。けどそう言われて私は胸を撫で下ろす。少し西東くんのためになれたかな。

「といひでいつも、晩御飯は三宅さんが作つてるの？」

「うん。うち、お母さんもお父さんも働いてるし出張多いから。兄さんもいるけど一人暮らししてるしね」

私の家では小さい頃から両親が働きに出てたから、家事は私と兄の仕事だった。特に料理は兄が苦手な事もあって得意だつたりする。

そういうと西東くんは目を輝かせて

「三宅さん、頼みがあるんだけど・・・」

「料理教えてくれないかな？」

二番目（後書き）

多分続きます。

「え？」

わたしは口を大きく広げたまま固まってしまった。

「だから、料理教えてくれないかって」

「だめだよ！私の料理、家の味だし、自己流だから、西東くんが食べるような」飯作れないよ…。」

「西東くんが食べるようなつて…俺がどんな料理を食べると思つてるか知らないけど、今まで母さんの手作りだつたし、小学生のときはみんなと同じ給食を食べてきた。あと俺、家庭の味つて好きだよ」

そんなことを言われてまた顔に血が上つてしまつた。今私の顔は目に見えるほど真っ赤だらう。

「けど……」

本当は教えるのもいいかもしねないと思つてる。けど、私には無理だ。西東くんは人氣がある。クラスメイトの安達さんとか、合唱部の三枝さんとか・・・私の知つているだけで片手の数ではくだらないほど彼のこと好きな人がいる。このことがあの人たちにばれてしまつたら平穀な生活は送れないだらう。

「やつぱり私には無理だよ」

「・・・そこまで言うなら仕方ないか」

よかつた。ちよつと残念だけどこれも私の平穀な学園生活のため。

ありがとう、西東くん！

「やついたら前から気になつてたんだけど、裏庭で昼飯食べると
き視線を感じるんだよね」

ギクッ

「あ、いつも昼飯食べる屋上から裏庭見たよね」

あーこれはもしかしてのもしかして最初から気持ちがばれてたパタ
ーンですか。いやーそんなことこれっぽっちも氣つきませんでした
よ。

「もしかして……」

うわあああああああああああああああああああああ

「飯田が好きだよね？」

「え？」

「あ、違うか。じゃあ健司？」

気づいてなかつたあああああああ

そうだ、そうだった。西東くんはいつもグループで飯食べてるん
だ。でも、好きな人が自分だとはこれっぽっちも思っていないよう
だ。抜群プロポーションの安達さんの悩殺アタックも、小悪魔系女
子三枝さんのベタベタアタックも気づかないくらいだもんね。西東
くんは近年稀に見る鈍感男子だ、理解した。

そんなことを考えてたら西東くんは無言を肯定ととつたらしく、

「健司が好きだって」と、バラされたくなれば料理を教えてくれないかな。了承してくれるなら誰にも話さないよ」

健司君には悪いけど、これは好都合なので騙されておいてください。でもそれならばここで断るのはおかしいかな。んー・・・仕方ないか。

「わかりました。その代わり絶対バラさないで」

「大丈夫。約束は守るよ」

今までで一番の笑みをとても近くで見てしました。

思考が停止して、そこからの会話は覚えてません。

思考が正常に動き出したとき、私は私室のベットの上にいました。しかも、田の前には西東くんの綺麗な顔があります。神様は私を殺す気なんですね？

「大丈夫？ いきなりなにも反応しなくなつたからびっくりして……」

西東くんが私の心配をしてる。不謹慎だけど少し嬉しい。

「あれ、なんで西東くんが私の家に？」
「あ、それはね……」

「佐奈江、生きてるか」

ん、なんか聞き覚えのある声が聞こえたような…

「おい、起きたならさつさとベットから出て顔洗え
「つむさいわね四郎。なんでここにいるの」

こいつは幼馴染で悪友の木村四郎だ。四郎とは昔から一緒に悪事をしてきたんで、私の隠したい過去を大量に知ってたりする。いつもうるさいお母さんみたいで頼れるんだけど、頭が悪いのか口止めしているのに私の過去を何度も人に話そつとする。まあ、いつも私が止めてるけど。

つてかこいつ、隣の家に住んでいのはずなんだけど…

「そんな口きけるなら大丈夫だな。ああ、スーパーの前で倒れてる佐奈江見つけて、西東に家教えたのは俺だぜ。運んだのは西東だけだな」

「はあ？ なんで西東くんにやらせるのよ！ 四郎が運べばよかつたじやない！」

四郎はボクシング部だ。力だけは大量に余ってる。

「それは俺から言ったんだ。じつ見えても力あるし、三咲さん軽かつたよ」

そんなことを言われ恥ずかしくて縮こまってしまった。

「三咲さんって木村と一緒にすると雰囲気が変わるんだね。やっぱり幼稚園の頃から一緒だからかな？」

あれ？なんで西東くんがそんなことを知ってるのかな？誰にも話していない筈なんだけど。犯人は一人しかいないよね。

「四郎！あんたまた勝手に話したの？前にもに言つたよね、昔のことを話すなって。どこまで話したのよ、吐きなさい！」

どうしよう一昔のことがばれたら西東くんに引かれる可能性大だ。

「いやー、小学生のときはじめてやつてたこととか、中一のとき中学の番長倒して一部有名だったこととか、色々」

・・・もう死んだ。もよおなら大人しい私。もよおなら西東くん。

「うん。本当にかついいよね。二年生の武勇伝。学校での二年さんよつ、いつの二年生のせつがいいよ」

「え」

「今度から俺にも普通に話してね？」

あれ、幻聴かな？西東くんが嬉しそうに話してゐる。

「ん、もうこんな時間だ。今日のところは帰るね。また明日来るから。今度は料理教えてね」

やつて颯爽と西東くんは去つて行った。

「ねえ四郎」

「なんだ？」

「これって夢かな？」

つい聞かなくてもわかつてることを聞いてしまった。

「現実だ」

頭がまだこの状況を読み込めていないのか、私の意識はまたブラッシュアウトしてしまった。

さんわめ

窓から空を見る。今日の空は雲一つない青空だ。でもわたしの心は微妙な曇り空。この空を見ていると昨日のことが嘘のよつた気がしてくる。

「佐奈江」

「この声は四郎のものだ。朝が弱い私のために四郎のお母さんが迎えを寄越してくれる。

「現実逃避している所で悪いが早く行かないと遅刻するぜ」

「もうこつも出発してる時刻になつてこる。

「あつがと。…四郎はどうするの？」

「俺と一緒に行くの嫌だろ」

そりや、四郎みたいな目立つ男子といたらなに言われるかわかつてゐるし。

「…まあね。こつてきます。鍵よひしへね

「おひ

四郎には家の鍵を渡してある。それは四郎に絶対的な信頼を寄せているからだ。好きとかそういう感情は一切ないが私の背中を任せられるのはあいつしかいないと思っている。
好きなのは西東くんだけだね。

「おはよー」

「おはよー、佐奈江ちゃんー。」

このふわふわ可愛い女の子は市原亜子ちゃんだ。中学校のときについた後輩にそつくりでホント可愛い。

「亜子ちゃんおはよー。今日は教室騒がしいね。何かあつたの？」
「また男子が暴れてるだけ。殴り合いとかしないだけマシだけど消しゴムのカス投げ合つたり、授業中に先生で遊んだり、今時小学生でもやつてなこよつなことをしてるとか」藤中くんたぶん

このちよつと毒舌な所も彼女の愛すべき場所だ。ちよつと言こすぎだとは思うが、でもこの頃藤中たちが調子のつてきてるのは本当。
『俺つてみんなの人気者? ふざけてる俺かつこいい』みたいなことでも思つてるのか? 鬱陶しい。ああ、一発殴りたい。

「本当にね。でももう高校生なんだよ。そのうちに今やつてることが恥ずかしくなつて、すぐにやめて大人になるよ」
「やつだといいんだけど…」

そんなたわいもない話を続けていると先生がきたのでおしゃべりを中止し席へ戻る。

「えー今日の予定は…」

今日は西東くんが家にくる。昨日のうちに部屋は掃除したし、料理

の本もかたっぱしから出してきた。

今日は浮かれて眞面目に授業を受けられないだらう。まあ、大丈夫だらうけど・・・。

「佐奈江ちゃん大丈夫？」

「うん…」

大丈夫じゃなかつた。すべての授業が耳に入つてこないんだよ。先生にあてられても何も答えることができなかつた。藤中たちには笑われるし。あいつ殺すいつか殺す。

うん、そうだ。亜子ちゃんにノート借りよ。あの子のノートは私のより綺麗だ。あー亜子ちゃん可愛い。

「亜子ちゃん。ノート貸して、明日返すから」

「うん。私でよければ」

ここまではよかつたんだ。

「うわっ、あいつ市原にノート借りてるぜ」

「ああ、三宅か。あいついつも市原の近くにいるけど、おじがましいっていうか引き立て役みたいな?」

「頭も悪いみたいだしな」

はははははははははははは
ここからここまで頭がイッてるとは思わなかつたわ。本当のことで

も重いこここじと懸こじがある。馬鹿なの死ぬの？

「あこつりー。」

田立ちやんが出て行けりとするけど、私が手を掴んで止めた。
田立ちやんには悪いけど田立ちたくないんだもん。今日西東くん来る
し、早く帰りたい。

「まあまあ田立ちやん。あこつらのあの姿を見てみなれ。あの腰
パン、ズボンをちやんと上げれない子供みたいでしょ。あい
つらは体だけは育った小そこ子供なのよ」

「ブツ」

気づかなかつたが、私はそいつのムカついてたようだ。

「おこてめえ、今なんつた」

「つねせえんだよー。」

あーつるせこひるせこ。おまえのペーちゃんさつてやうりつか。
けど、じじで藤中に一発かましたからこれまで取り繕つてきたものが
剥がれ落ちるだらう。

西東くんがジーのジーのだつて言つ前に自分から死地に片足を突つ
こんでしまつた。時間、まきもどらなこかな。
じじで少女漫画のヒロインだつたならヒーローが助けにきてくれる
んだうひ。田立ちやうだけど。

「藤中ー。二年生になにしてるんだ」

おつじ、じじでヒーロー西東くんの登場だ、つてえええええええ
えええええ

なんで西東くんがここにいるの?しかもいのち悪いのがこんなタ
イミングに・・・。

「なんで西東がいるんだ」

「つーかおまえには関係ないだろ!」

みぎよーし、ひだりよーし。この教室に残っているのは藤中とその
取り巻きたち、亜子ちゃんに私と西東くんだけだ。安達さん(西東
くんが好きな女子のうちの一人)がいたりいろんな人にこのことが
しれわたつていただろう。あの人は噂の発信源みたいなものだしな。

「三井さんは俺の友人だ。馬鹿にするのは許さない」

隣の亜子ちゃんからいかにも興味津々といった眼差しが送られてき
ます。いやーやめてええええええ!

・・・ハアハア、この私壊れてきたような気がするわ。
でも西東くんよ、助けるなりもつとスマートに助けて欲しいな。か
っこいいけど。

「藤中!もう5時だぜ。女子高の女と遊ぶんだぞ、早く行こう!」
「うひ、仕方ない、行くぞ!」

「うつじて嵐のような一コマは去つて行った…と思こせや

「明日は覚えとけよ」

意味深な言葉を残して行きました。関係ないけど今のセリフ悪役み
たい。

「佐奈江ちゃん！大丈夫？」

「うん、変なことに巻き込んじゃってめんね」「うん、佐奈江ちゃんは悪くないよ。ねえねえそれより、何時の間に西東くんの友達になつたの？」

答えていくことを聞くなあ。わたくし、どうしたてるか。

「えーと、えー、かくかくじかじかで…」

「もつー！小説や漫画じやないんだからそんなのじやわかんないでしょー！」

まあ、今日の所は帰るね。畠中せりやんと全部聞かせてもらひながら！

「何か用事でもあるの？」

「むむつ。あるのは佐奈江ちゃんでしょ？予想だけど西東くんがこの教室來たのつて佐奈江ちゃんに会つためでしょ？ああ、私お邪魔かな。じゃあねー！」

「う、うん。バイバイ」

「わよなー、木村さん」

「西東くん。何か用事があつたんじゃないの？」

「うふふんば、と西東くんに聞いてみる。

「んー、昨日の料理の件、あやまつてきたんだ」

「え、なんで」

「昨日は強引過ぎた。ほんと『めん。脅すよ』なことわざついたやつたし、断つてくれてもいいよ」

「ううん。一回私が引受けたんだし最後までする」

考える前に先に言葉が出た。やはりいろいろ取り繕つていっても出でくるものはあるのだろう。

「やつか

返事したことに後悔はない。むしろ役得だつた。西東くんのハニカミ笑顔見れたしね。

「一緒に帰ろうか？今日は卵焼きの作り方を教えるよ
「了解です。できれば甘いのがいいな」
「ふふっ、オッケー」

やつ語つて私たちは歩き出した。

過去編（前書き）

本編更新しなくてすみません。

今時あり得ない下駄箱にラブレター。

もつとあり得ない校舎裏の桜の木の下に呼び出された三宅佐奈江は、幼馴染で友人である木村四郎を引き連れて待ち合わせ場所に立っていた。

「佐奈江、なぜここに俺を連れてくる」

「そんなの決まってるじゃない。手っ取り早いからだよ」

桜の木の下とはいっても今は夏だ。ピンクの可愛らしい花も、甘い匂いもない。清々しくらいの縁がそこら中に広がっている。その下で言い争っている男女は第三者からみれば痴話喧嘩のように見えるかもしれないが、二人を知っている人物なら誰しもその様なことがないことがわかるだろう。

「いくら楽だからっていつてもよ、火の粉が吹きかかるのはこっちなんだぜ」

「四郎なら火の粉くらいかかっても大丈夫よ。四郎のいいところはその丈夫な体だけだと思う」

「なんだと！」

「本当のこと言つただけだよ」

四郎は言い返そうとするが背後から足音が近づいて来たので途中で言葉を飲み込んだ。

「三宅さん。来てくれたのは嬉しいけど、隣の男は何かな？」

一人の後ろから優男風の男が現れた。恥ずかしいラブレターを書き、

この時代遅れな呼び出し方をした張本人、桜井平祐だ。サッカー部のキヤブテンで月に五人には告白されるほどのもてっぷりだ。

佐奈江は隣にいる四郎と腕を組み、表の顔で対処した。

「桜井くん。こういう訳だからあなたとは付き合えない。本当にごめんね」

佐奈江は顔は中の上だ。なのに何故か顔のいい男が引っかかる。その度に四郎が恋人役になつて追い払っているが、四郎にはなぜ佐奈江に集まるのかわからない。

「その隣のやつ木村四郎だよね。君みたいな大人しい子にそんな不良は似合わないよ」

その言葉を聞き、四郎は笑いを堪えるのに必死になつた。

「なに笑いそうになつてるのよ
「だつて」

三宅佐奈江は学校では素行の悪い四郎の幼馴染と認識されている本当はは違う。佐奈江は四郎より遙かに強い。昔から祖父の道場に通つていたからだ。その辺の不良を殴り倒しているうちに『裏の番長』と呼ばれることになつた。正体はばれていないが佐奈江の知らぬ間に『裏の番長』の名はそこらじゅうに知れ渡つていた。

そんなこともつゆ知らず、桜井は一人で小声で話していると苛立つたのか先ほどより強い口調で話しかけてきた。

「木村四郎なんかといったらいつ襲われるかわかんないよ。あいつなんかやめて俺と付き合おつ!」

その言葉を聞いて、「うれしい」といたものが決壊した。

「あはははははははははははは」

「四郎！ こんな所でわらわないでよ。」

「はははっ、だつて大人しいとか、襲われるとか一番佐奈江に似合
わない言葉じやないか」

「四郎。黙りなさい」

「うふふ」

四郎の鳩尾に佐奈江の容赦ない鉄拳がとんできた。四郎はその場で
うずくまる。

桜井は未だに見たことが信じられないのか某前としている。

「桜井くんだけ？ 今見たこと忘れてくれない？」

桜井は未だに固まつていて佐奈江の言つていることが理解で來てい
ない。

「ねえ、話聞いてるの？ それとも四郎みたいに実力行使に出ないと
わかんない？」

桜井の顔はみるみるうちに青くなつて行く。やつと佐奈江の言つこ
とが理解できたのか首を上下に降り、震えながらこの場を去つて行
つた。

「佐奈江、いくらなんでも脅しそぎじやないか？」

「脅してないわよ。あいつは上辺の私しか見てなかつたからああな
つたのよ」

「上辺って・・・お前が本当を見せてないんだが。そんなんじやい
つか壊れるぞ」

「・・・そうかもね。」

佐奈江は珍しく弱音をはいた。いつも、すこし傲慢で前向きなのに。佐奈江の不安そうな顔を見たのは四郎はこれが初めてだった。

「私を受け入れてくれる人つているのかな？」

「大丈夫、現れるさ。それまでは仕方ないから俺がそばにいてやるよ。」

「・・・ほんと今日は四郎のくせに生意氣」「言つてろ」

そこで風が吹いた。夏の乾いた風だ。いつもは少し不快なのに佐奈江には嫌なものを全てを吹き去つてくれたように感じた。

「帰ろうか」

一人はどうちらともなく咳いた。それに答えるように夏の風が一人の間を通り抜けた。

よんわめ

今、西東くんと私は自宅のキッチンにいる。西東くんに料理を教える為だ。

「さて、それでは第一回三宅流料理教室を開催したいと思いまや」

「おー」

でもこれ、二人でしても虚しいだけだな。
…まあいいや。

それより今は料理の献立のことだ。卵焼きとお米炊いて…あとなに作ろうかな? 西東くんに聞いてみるか。

「西東くんにか好きな食べ物とかある?」
「角砂糖かな」

…ん?

「…・・・じゃあ料理では?」
「チョコレートフォンデュ。いやそれは甘いもの嫌い?」

「いや、嫌いじゃないけど」

好き嫌いじゃなくて根本的に間違つてる気がする。そんなものすこい笑顔で言われてもどんな反応をすればいいか悩むよ。けどどうやら西東くんはとても甘いものが好きらしい。

・・・デザート、なにか作れ?」

「じゃあ、嫌いなものとかある?」

「それはないよ。でもわけわかんない国の食べ物は苦手かな」

「ははつ、なにそれ」

んーそれだつたら、初心者でも簡単なやつで。あと甘くて、あつ西東くん家庭の味が好きだつていつてたな…。なんか新婚夫婦みたいつてうわああああ！私つてばなにを考へてるんだー告白してねえんだぞ！

はあ、落ち着け私。そうだ。西東くんには卵焼きだけ作つてもらつて他のは私が作ろう。

「それじゃあ西東くんには卵焼きだけ作つてもらいます」

「難しそうなんだけど俺に作れるかな？」

「大丈夫大丈夫！私も手伝うから」

「そうだよね！……うん、ごめん」

「なんか言つた？」

「ん、なんでもないよ」

「どうかしたのかな？まあ大丈夫だらう。よし！」

「献立が決まりました。メニューは米と肉じゃがと卵焼き。そして食後のデザートはパウンドケーキです。西東くんには卵焼きを作つてもらいたいです。作り方は隨時教えます」

「了解です。他は三宅さんが作るの？」

「料理初めての人には全部作れとか酷なことは言えないからね」

「わかった。精一杯のことはするよ」

「どうしたくなつた。」

「これはなにかな?」

「・・・卵焼きです」

「私、引つくり返すといひままでやつたよね。あとお皿に移すだけだつたよね」

「・・・はい」

テーブルの上にはホカホカの肉じゃがと白く輝いたお米、いい匂いのパウンドケーキ。

あと…黒い奇妙な物体がのつていた。

「じめん。俺、昔料理の練習したことがあるんだけどさつと手を加えるだけで料理を灰にしちゃうみたいなんだ。だから三井せんじ料理のことたのんだんだけ…なんでこうなつちゃうんだる…」

うん、その台詞私が言いたいくらいだよ。

「ま、まあ今田は初田だし頑張つたほうぢゃないかな?」

「いや、ほんとじめん。食材無駄にした」

西東くんが本当に悲しそうな顔をして言へ。

「やつぱり俺には無理なのかな…」

「今からそんな弱気になつてどうすんのよ。大丈夫、明日があるし明後日もあるんだ。毎回弱気になつてたらつかれるよ」

あ、私今いいこと言つたんじゃない?

けじゅうひとつ寒かつたよつな…

「ありがと。でも三咲さん、その台詞くせこ」

「うわあああああああわかつてー今ちょっと後悔してるとこんなんだー!そつだ、『飯早く食べないと冷めちゃうよ。』いただきまー。」

「はははっ。いただきまー。」

恥ずかしいー私は羞恥心を紛らわす為に食べる」と逃げた。

「あ、それ食べちゃダメだー。」

「へ?」

ところ構わず食べに食べた。つい、あの黒い物体までも腹の中へ入れてしまつたのだ。

「うーー。」

「三咲さんーしつかりー。」

西東くんが呼んでる。答えないといけないのに、意識が遠のく…。

くうー。あれ?こんなこと前にもあつたよつな。

「三咲さんー大丈夫?」

え。西東くん？ああ、少し意識が飛んでいたみたいだ。

「大丈夫。…西東くんの料理す”いね」

「”めん。次はちゃんと食べられる料理を作れるよ”にする。あー。」

「どうしたの？」

西東くんはメールがきたみたいで携帯を操作しながら言つ。

「木村くんが””に来るらしいよ。””飯作つてだつて」

あれ？西東くんって四郎のメールアドレスしつてたつてけ？
すると私の考へてることが顔に出てのか西東くんは答えてくれた。

「””の前””さん””が倒れたとき教えてもらつたんだ。三宅さん、あまり身体強くないつて聞いたから何かあつたときの為にって」

「そんなことまで四郎と話してたんだ」

「うん、勝手に聞いちゃつて””めんね」

「謝つてもらわなくともいいよ。どうせ四郎からはなしたんでしょう」

「まあ、””だけじね」

それからたわいのない話を続けて””に四郎が来たらしい。

「おー西東。””この面倒見ててくれてありがとうがとうな

「毎度のことだけじノック””しなさ””よね」

四郎は呑気に私の部屋に入つて來た。いつものことだけ。

「佐奈江、調子悪そうだな？何か食つたか？」

「あ、それは俺が変なもの食べさせやつたんだ」

西東くんが言つと四郎は納得していない表情で

「お前そんな纖細な腹してたつけ？」

と不躾なことを聞いてくるから西東くんの料理を口の中に突っ込んで見た。

やはりあの料理？は破壊力抜群らしい。四郎は憮くも散つていった。
さまあみろ！

私たちみんなでご飯を食べた。西東くんはパウンドケーキが氣に入つたようで、今度作り方を教えて欲しいとのことだった。
それから少しして西東くんと四郎は帰つていった。

今日はたくさん西東くんと話したなあ。

それと明日も料理を教えることになつた。明日は楽しみなんだけど、
思い返してみれば学校での藤中の言つたあの言葉が心配だ。

『明日は覚えとけよ』

…ふつ。こやーーこの台詞はないわー。でも藤中たちのことだからよからぬことをたくさんでいるんだひつ。あいつらの下衆な脳味噌で考えつくれことは少ないかな。

明日の決戦に備えて今日は早く寝るか。
そのときの私は凄く君の悪い顔をしてたことだひつ。

おやすみ。また明日。

私は心の中で西東くんに語りかけた。

「三宅さんだつけ？あんたみたいな地味なのが西東くんと仲いいって聞いたんだけどなんかの間違いよね？」

やつぱり「うなつたか。

今は放課後、そしてここは視聴覚室だつたりする。そしてここにいるのはあの藤中たち、そしてクラスメイトの安達さんだ。
藤中がこんな仕返しをしてくるとは思つてなかつたよ。そういうえば藤中、安達さんと仲よかつたつけ。まあ藤中が安達さんを好きなだけだのようだけど。

「なんなんですか？いきなりこんな所に連れてきたりたりして」「つむせえ！大人しく安達さんの質問に答えろよー。」

はあ？無理矢理ここに連れ込んだのはそつちだらうが！事情説明しろよ。まったく。

…言わないけどね。

私は大人しい佐奈江ちゃんだもの。

でも視聴覚室なら音がもれないからつづりよつとやりすぎじゃないかな？あとこいつら無駄に手際がいいな、何人もの子に同じことを働いていそうだ。

つていうか藤中らだけに恨み買つたはずなのになんなんだこれは？

「西東くんとはただの友達で…」

「嘘よ。西東くんが何も言わないからつていい気にならないで」

この気のキツイ美人さんは安達さん。頭も良くてすこいひとなんだ

けど、自分の思つた事に一直線な子だ。彼女に地味な女と西東くんとが仲がいい=一方的なストーカーと脳内変換されているらしく私を駆除しようと必死らしい。

まあそれもこれも藤中が安達さんに昨日のことを話したことが原因だ。藤中のせいだ。ホントつかれこ。

「西東くんも迷惑してるわ! いくら好きだからでは通用しない、もうつつきまとわないで」

「そんな、私つきまとつなんでしてない……」

安達さん、頭大丈夫かな? 付き合ひ始めたわけでもないのに。いつも心配してもしようがないか。

「でも西東くんも西東くんよ! こやならこやと並べばここに…もうなんでこんな子と…」

「安達さん。」こいつ懲らしめてやつましょ! 「こんな喧嘩とは無縁そつなやつはひと殴ればいいって近寄りなへなりますよ!」

「やつですよ!」

はあ? 何言い出すんだこいつらー私が先生に話すとか思わないわけ? しかも殴つたらあと残るしバレバレなのに。」

「…やうね。やつてしまこなさい」

つて暴力反対ー! までするか普通?

あーもう今日は西東くんぐるの! 遅れたら何があつたのかつて疑われる。どうしよう!

「」

「ああ、顔はバレるから殴りなごみにしてね
「わかってるって」

私のビードが怯えてるんだよ。

…もういいか。西東くんにはばれてるし。口上を止めしたら
ばれないよね。私、今までよく我慢したよ。

そういえば、西東くんは昔の頃の私の話を聞いても変わらず接して
くれたな。凄くあつさりだつたけど嬉しかった。

『私』を知っていても変わらない人つていたんだ。西東くんもだけ
ど四郎や亜子ちゃんもいてくれたんだ。
自分をされけだしてみよう。

少しだけ勇気を。

…警察に捕まらない範囲で。

「あんたたちわあ、わざわざから生意氣な口聞きたくない？」

私がそつぱつと咄びつくりしたような顔をした。私がこんな口答え
をするとは誰も思っていなかつたようだ。

「はあ？お前なに言つてんだよ」
「いきなり糀がるなよー。」

「「うぬわー」

今の藤中や安達さんの顔みんなに見せてやりたいね。

私は藤中の顔ギリギリに壁を殴る。

少しの音と風で壁がへこんだ。バラバラと壁の破片が落ちてくる。
そして他の男共の顔から3ミリ程度の所に拳を叩き込んでいく。
もちろん手加減なしで。

それから少しの沈黙があり

「つあああああああああああああー……。」

「「じこつやべー！」

安達さんは一応女子なので勘弁しといつてあげたよ。それでもあまりの事に口が出せないみたいだけど。

「逃げるぞー！」

藤中たちは安達さんを置いて視聴覚室から出でていった。

「わー、あなたはどうする？」

少しの静寂のあと。

「力が強いからつていい気にならないで。西東くんは私のなのよー。」

安達さんは不気味な笑みを浮かべ凄んでを見せた。まるでいきのいい獲物を見つけたみたいな目つきだった。

「西東くんをものみたいに扱わないで。あなたなんかに西東くんを好きな気持ちなら負けないよ」

そう。私は西東くんが好きなんだ。出会つてからまだそんなに時間は経っていない。けどあの人なら信じられる。そういうと安達さんは何故か飽きたような顔をしてため息をついていた。

「…もういいわ。悪いけど手を貸してくれないかしら」「え、うん」

安達さんはいきなり態度を変えた。その変わりゆうに私は不覚にも驚いてしまった。

「今日の事は謝るわ。…どうしてそんな変な顔してるのよ」「え? いやなんかあったのかなって」

どうやら顔に出てたようだ。これからは表情筋を鍛えよう。

「変わったわけじゃないわ。ただあなたが以外にも骨があつそうだったから違う方法で潰そうと思つただけよ」

凄く怖い言葉が聞こえてきたんですけど。これは辞める所じゃないのかな?

そりやあ西東くんの事好きだし、付き合えればいいとか思つてたりするけど潰し合いとかしたいわけじゃないよ。この頃話しある人が多くないかな。

「私は帰る。ああ藤中には私から手を出さない様に伝えておくわ。

じゃあね

「え、あ。ありがとう」

あれ？友達とかじゃなかつたよね。でも安達さんはいい人のようだ。
話し通じないけどね。

みんな帰つたあとの視聴覚室はとても静かだ。

この数日で色々な事があり過ぎて世の中を達観しちゃいそうだ。あ
ー明日は大変かな。

ま、そんな事より

「西東くんも来る事だし早く帰ろつか」

わくわめ

今日もいい天氣です。昨日は安達さんとのことがあった後、西東くんが来てくれました。私の事を探してたんだそうだけど、姿が見えなくて焦つてたそうだ。すいません…。西東くんには迷惑かけてばかりだな。

「三宅さんー前つ前見て！」

「へつ？」

そつして見た前方は光が反射して真つ白に見えた。

「オオオオン

「痛つ！」

痛みで正常な思考が出来ていながら私が自動ドアに顔面から衝突した事は理解した。

羞恥と痛みで何もできずにいると額にぬくもりを感じた。
気持ちいい…。顔を和ませていると

「大丈夫？」

・・・・・つ！…！

「ふあつだだだいじょうぶ！」

びっくりした！温かいなーとか思いながら微睡んでたら、さつ西東

の手がつ！

うわー恥ずかしい！

「そう? 我慢とかしないでね」

「めちゃくちゃ 頑丈だから全然平気!」

隣にいるのは西東くんだ。黒のTシャツとジーンズというカジュアルな格好だけど、西東くんが来たらすげくさくなる！いつも見ている制服もかっこいいけど私服も素敵だ。やっぱり顔のいい人は何着ても似合つものなんだな。

まあそんな事はおいといてだ、実は私、西東くんと一人っきりで外を歩いてます。

なんと今、私は…

西東くんとデート中なのだ！

事の発端は昨日、私の家の西東くんの「」の一言だった。

「カレーの材料つて何がいるのかな？」

「うーんとね、カレーの種類によつて考えないとなんとも言えないかな。何でそんなこと聞くの？」

「それがね、この頃父さんの仕事が決まって母さんにも余裕が出来たし、皆で『』飯食べようかなと思つて」

キラキラ光つてるー。

す』』へいに笑顔です西東くん…やつぱり笑つた顔が一番いいな。

「三井さんへ。

ハツー顔にやけてたよね。だめだだめだ。でもよかつた。西東くん嬉しそうじで。

あれ？

でもそれじゃあ料理教室の事が無くなつて西東くんともほとどく会えなくなるんじやない？

「うそ、それはよかつた」

この時の私は強がつていつたから表情が歪んでいたと思つ。けだしんなことは気付かずじしゃべつづける。

「これで私も料理教えることは無くなつて手間もかかりなくなるよ。西東くんと話すことも無くなるのかなあ…」

本心じゃない言葉が口から出るむづむづ止めるのに止められないと。

「俺はやめないよ。二郎さんが嫌でもやめれない」

なんで。じりじり。

「やつしなじと二郎さん、俺とかかわりをもたないよね？」

だつて私は地味の枠から出たくないんだもん。西東くんのことは好きだ、けどそれとこれとは話が別。

「三郎さんと話すの好きなんだ。一緒にいるとなんでもないのに楽しい。」

西東くんそんな」と思つてくれたんだ。けど私は地味で西東くんはかつて良くて。

美形は美形と結ばれる、それが定石なのに。

「こなことは君に出来つまで知らなかつた、君の傍は心地よくて手放せない」

あれ？

つてこれつて告白なんぢやない？

もう地味だとかなんとか言つてらんない！返事しなきゃ私も西東くんが好きだつて。

迷いはまだある。

けど、けどだ！

安達さんが私をライバルと認めてくれたのに、四郎が応援してくれてるのに、西東くんが誠実に心の内を明かしてくれたるのに、私は何なんだ。

ずっと引きこもつてばかりで、昔の事に引きずられてばかりで。
私は自分の扉を開きたい。

容姿だとか関係なく西東くんに…

「私も西東くんと同じ気持ちです」

それを言うと西東くんはとても嬉しそうな顔になり

「ありがとうございますーやっぱり私もまたみたいに心をゆるせる友人を失えないよ」

友人？

ゆうじん？

ユウジン？

「私も西東くんのこといい友達だと思つてるよ」

今までの葛藤は何だつたんだ。

なつ泣きそう。でもウザがられていらないだけマシなほうかも。
まだ恋愛に発展する可能性はあるはずだ。そうだそつなんだ。

「で、話を戻すとカレーの材料買づのに付き合つて欲しいんだ。
でね、君にはいつもお世話になつていてるから早めに出かけて昼食奢
るよ」

ああ、西東くん。これは飴にムチなの？

そんなので機嫌がなあとと思つたら大間違いなんだから！

「え！いいの？今から楽しみだよ」

私のバカーテート（誘つた本人はそう捉えていない）に誘われたからってすぐに態度を変えちゃうなんて私ったら浅ましい！

「じゃあ今週の日曜日空いてる？」

西東くんに誘われるなら他の用事断つても行きます！地の果てでも楽しく過ごせる自身があります！まあ予定は何も入つてないけどね。

「空ってるよ。場所は任せた」

「うん。じゃ10時くらいに迎えに行くね」

うわー西東くんとテートの約束が出来たよ。もう今死んでもいい、いや今度の日曜日までは生き延びないと！ふふふっ楽しみ。

あ、また意識が飛んでいた。せつかく西東くんとテートなのに。幻覚かな？西東くんの顔が見える。麗しい。顔は心までも表している

のかな。

「いいやあこだれよだれ」

「いはせりー。」

おひとせばこやばこ。」のままだと私もまるで変態じやない。

「それじやあ行こうか」

そうだ。私はアーヴィングが家の近くの「ハンリー」からまだ動けていない。

「どさんこー。」

やつはいつ西東くは呆れた顔をした。

「もつと可愛らしく返し方はあるさじやない?...も、それもいいやれんかな」

私たちのトーク(主観)はまだ始まつたばかり!-

ななわめ

最寄りの駅からバスで數十分のところにあるショッピングモールにきました。なぜカレーの材料を買うだけなのに遠くまで来ているのかと言うと。

「西東くん！みてみて、この猫すばらしい可愛いよ！」
「わつ！ふわふわだね。あつ、向こうの子もかわいいよ」
「ホント…えへへへ可愛いなあ」

このショッピングモールに隣接してある広場では頻繁にイベントが開催される。

今回のイベントは『触つてめでよう動物たち』だ。
この知らせを聞き、動物好きの西東くんと私はすぐさま行き先を近くのスーパーから変えたのだ。

「三毛さん三毛さん…向こうでねつねつがいるんだって」

「えーほんと…」

そう言つて西東くんが指示した方を見てみると、白や茶のもふもふが沢山！

あのもふもふまで直線で約30m。待つてて。今行くわ！
駆け出したところで前にいた人の足を踏んでしまった。しかも今日履いているのは低いけれど結構細いヒール。これで踏まれたらすごく痛いだろう。

「いっ！」

「うわああああ…すみません…ほんとうにすみません…」

「いや、そんなに謝らなくても……って佐奈江か？」

「ん？」この声聞き覚えがすんごいあるんだけど。一人は幼馴染でもう一人がその父親だ。そして動物好きでここにきている可能性があるのは……。

「四郎…どうしてここにいるのよ」

「は？ なんでおまえがここに」

「それはこいつの台詞よー！」

「三井ちゃんー！」

何か揉め事に巻き込まれたと思ったのか西東くんが走ってきた。そんなんに勘違いされそうだったかな私。

「どうしたの… って木村くん！」

「ああ、西東と来てたのか」

史郎がニヤニヤしながらいつもを見せる。あのにやけ面はがしてやりたいわ。

「木村くん、どうこうえばどうしてここにいるの？」

四郎の体がビクッと揺れ、が表情凍つた。

「ああ、色々あってな。まあそんな事より、お前ら向か買いにきたんだろ。俺も付き合ひてやるよ」

けど次の瞬間にはそんな姿を微塵も見せず、私たちを引っ張った。この場に名残惜しそうな視線を残して。

その姿を見た私はほくそ笑んだ。ふふついい事思ついた。

「えー」この子達に触らなくていいの四郎？」

「えつ 西東くんも小動物好きなの？」

少し大きめの声で言い、近くにいたうさぎを持り上げる。「おー思つていた通りもふもふだ。

四郎は浮かれたようにうさぎに手を延ばしてきた、が夢から冷めたよう屹て手を引っ込める。素直じやないんだから。

「お、おれはうわなんか好きでもなんでもねえ？？」

その様子を見た西東くんは何かに気づいたよつこやつとした。私の考えが読めたようだ。

西東くんも足元に屈たうさぎを抱きかかえた。四郎の真ん前にきてうさぎをいじくつまわした。西東くんと一緒に。そして一通り撫で回したあと。

「そろそろ行こうか木村くん」

「わづね、行きましょう四郎」

この時の情けない四郎の顔は忘れる事ができないだろう。あの名残惜しそうな顔を。

「四郎くんつておもしろいね」

「当たり前、私の幼馴染だからね」

「佐奈江、どうこう事だ」

場所を移してここは駅の近くのフードレス。

買い物をしたあと四郎と西東くんを連れてここに来た。西東くんは西東くんは

西東くんは今、四郎に頼まれ席を外している。

「何のこと?」

さつききたジユースにストローをしながら田を逸らした。わかってるんだけどね。

「約束、はぢりしたんだ。言わないつて、あの時言つたじゃないか。

しかもお前ら、おれで遊んでただる」

ホント四郎は好きな物がかわるときだけは熱くなるよね。今はクーラダウンしてるし。いつもは母親系強面男子つて感じなのよ。けど、聞き捨てならないわね。

「別に話してないわよ。ちよつとほのめかしただけで。あと、忘れない?先に、約束、を破つたのは四郎よ」

一口ジユースを飲んでちょっと一息。四郎は、約束、で言葉で思い出したよつて私に何も言つてこない。

それぐらい私たちにとつては、約束、は大切な物だったんだ。

「…すまん」

無理やり絞り出したような声で絞り出した
言葉。四郎にとつてはもつあの時の記憶は薄れてくれるんだろうか。

「やつぱり忘れてたのね。……いいわ。四郎には世話になつてゐる
あなたが、約束、を無視したおかげで西東くんと仲良くなれてるよ
うな物だしねー。」

ま、これからもあなたが可愛い物が大好きだなんて言わないから

「西東は気づいてたみたいだけどな。多分今話してると内容もあいつ
には読めてたりして」

「四郎もそう思つたまに私の気持ちわかるんじゃないかつて思つ
時があるんだよね、西東くんは」

変なところで鋭いんだよね。

「話し終わつたし西東呼ぼつか」

「そうだね。あー西東くん」

西東くんは私たちが話が終わつたのがわかつたのかもう近くにきて
いたようだ。やつぱり西東くんは空氣を読む能力もつてたりして。

「話し終わったの?」

「うん。こめんね。待たせちゃつて」

「いいよ。内緒のはなしだったんでしょ。それより何か甘い物食べ
ない?俺はチョコレートにしようかな」

「んー。私はこの期間限定のタルトにするねー」

「へえーそれも美味しそうだね、僕の一口あげるからそれも頂戴?
いいよー。西東くんざれにする?」

「俺はチョコレートにしようかな…すみませーん店員さん」

デザートを頼む様子を見ていた四郎は「」の光景に呆然としていた。

ハツ！

今気づいたけど今まで西東くんとす「」に恥ずかしい」としてなかつたかな？いや、していた。

「おまえらつて付き合つてんのか？」

「え！そんなことないよ！」

私たちつてそんな風に見えてるんだ！なんかだか照れるな。
けど、私はこんななのなのに西東くんは全然慌ててない。私に恋愛感
情なんてこれっぽっちもいだかれてないんだ…虚しいな…。

この時に食べたケーキはあまり味がわからなかつた。

それからの帰り道、四郎は寄るところがあるので駅で別れた。
なので今は西東くんと二人きりだ。

「今日は木村くんと会つたし楽しかったね」「うん」

今日は楽しかつた。四郎にあつた事は予想外だつたけどそのおかげ
で西東くんと無言の時を過ごす事はなかつた。けど四郎が来た事で
私たちの関係がわからなくなつてきた。
四郎のせいでもないし、今日の事がなくてもいつか考えなきやいけ
ない時が来ただろう。

黙つて道を歩く。

「私たちの関係って友達なのかな？」

思わず声に出ていた。

しかし後悔はない。

西東くんにとつての私つて何？

友達？それとも他の何かなんだろうか？

「えっと…」

西東くんは言ひ。

俺たちはもつと深い絆で結ばれてるんだよ。

ななわめ（後書き）

多分おそらく次は過去編です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1781x/>

いちごの砂糖漬け

2011年12月1日19時52分発行